



たった一人のためにでも、世界をつなげたい。

CWS JAPAN

Church World Service

NEWSLETTER No. 42

世界的な新型コロナウイルス感染拡大をうけて —CWS Japanが大事にしたいこと

まさにグローバルな危機となった新型コロナウイルスの感染拡大に際し、被害にあわれた方々及びそのご家族に心よりお悔やみを申し上げます。また、感染拡大阻止に向け日々奮闘されている皆様に心より敬意を表します。CWS Japanでは引き続き国内外における感染拡大につながらない様に、移動や会議等の自粛を継続し、衛生行動を徹底していきます。

人道危機に対応する団体として、国内外で様々な災害による危機的状況に接して参りましたが、常に思うこと、それは一人ひとりが持っている人間性の素晴らしさ、そして強さです。危機的状況の中では、「何が一番大事なのか」を問われる事が多く、皆が想う「大切な人や、大事なものが大事にできる社会」を我々CWS Japanは目指し、日々活動しています。

度重なる災害や拡大する格差・貧困等により、世界の人道状況は悪化の一途を辿っており、新型コロナウイルスによる経済状況の悪化に伴い、現在苦しんでおられる方々は更に大変な状況へと追い込まれる事が懸念されます。また、新型コロナウイルスの脅威と同時に、その裏で、気候変動による気象災害や害虫被害など、様々なリスクと闘っている人々も今この時点でもたくさん居られます。私たちは必要な支援が必要な時に、必要な人々に届くよう、工夫を重ね、リスク対策をしながら事業を継続して参ります。

そして、この様な状況下だからこそ求められるのは、連帯感であり、皆が持つ人道の心だと思っています。私たちが人道支援の道を志した原点である「人を守りたい」と想う心は、人類皆共通しているものだと思っています。そしてその共通点で繋がる人類は必ずこの危機を乗り越えていきます。

この危機を乗り越えた時、国際的な連帯感が更に高まり、様々な災害リスクで苦しむ方々のレジリエンスが向上し、同様のリスクに将来より力強く対応していける社会になっている事を、CWS Japanは思い描きます。そしてそれに近づくように、自粛の制限下においても今できる事を日々考え、実行していきたいと思えます。

最後に、在宅勤務を行う際の多大なサポートをしてくれている各職員のご家族の皆様、感染リスクを常に分析しながらどの様に支援活動が継続できるかを一緒に考えてくれているパートナー団体やご支援者の皆様、社会のインフラを止めないように日々奮闘されている皆様に心より御礼申し上げます。

この危機の収束を心より祈念して。

CWS Japan一同



2020年3月発行

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、ご理解をいただき、ありがとうございます。

Facebook
twitter
instagramでも
情報発信しています！

最後のページを
ご確認ください☐

特定非営利活動法人CWS Japan

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館25号室



public@cwsjapan.jp



03-6457-6840

パキスタン防災事業の二年目が始動しました

パキスタン南部に位置するシンド州において、外務省NGO連携無償資金協力事業である防災事業の二年目が2020年3月から始動しました。シンド州はパキスタンの中でも恒常的に水不足に悩まされている地域で、干ばつという災害では、衛生環境や健康状態の悪化、主要な生産活動である農業の衰退とそれに伴う収入の減少、子どもの教育機会の不足といった、いろいろな影響を地域住民の生活に及ぼします。

一年目はシンド州の8つの村を対象に、恒常的な水不足への対応、干ばつという災害リスクの軽減、パキスタン政府の関連施策との連動を目指して、現地のパートナー団体であるCWSAと国土防災技術株式会社様との協働で、1. 水利効率化に関する情報の地域コミュニティへの提供、2. 貧困層における飲料水へのアクセス改善、3. 干ばつの影響がある農業用水・対応技術へのアクセス改善という3本柱を中心に活動を展開しました。各村において、地下水脈を探知して井戸の掘削、地下貯水タンクの設置、現地住民による防災委員会の結成、農法研修実施、家庭菜園の造成、そしてパキスタン・カラチでのナショナル防災セミナー開催といった成果を挙げることができました。



(完成した井戸の様子。井戸の水は定期的な水質チェックを行い、飲料水に適しているか否か常に確認することも重要です)

二年目では、新たに8つの村を本事業の対象として選び、一年目と同様の事業活動を実施していきます。対象とした村はタール砂漠により近いため、一年目に比べて地下水脈を探し当てるのによりチャレンジングになりそうです。一年目の事業活動や成果から得た学びや教訓を活かし、本事業のパートナーとの協働の継続さらに地元の農業大学との連携のもと、地域住民の持続的な裨益を見据えた成果を出していきたいです。

(文：プロジェクト・オフィサー
ライン 静香)

インドでイノベーション・ワークショップ第2弾を開催しました！

CWS Japanでは、英国のHumanitarian Innovation Fund (HIF) とのパートナーシップにより、アジアの減災課題に関してローカル・イノベーションの発掘・強化を目指し、フィリピンに引き続き、インドでも取り組みを進めています。

(次ページにつづく)



(井戸を掘削している様子。真水の層を探しながら掘削。現地はもともと海だったのだろうか、深く掘れば掘るほど塩水が出てくる)

インドでは大都市のみならず、国内全ほぼ土において深刻な水不足に悩んでおり、同時に雨季（モンスーン）の時期には洪水も多発します。両極端ながら甚大な被害をもたらす災害リスクを軽減すべく、NGO、企業、大学などで構成される8チームが以下の課題に取り組んでいます。

1. 洪水早期警報の改善
2. 洪水被害から妊産婦を守るための施策
3. 都市部における水ガバナンスの強化
4. 障碍のある方の防災・減災活動への参加促進
5. 汚染水の再利用・商品化
6. トイレによる地下水汚染の軽減
7. 溜池の環境的水浄化プロセスの促進
8. 雨水の効率的利用促進

新型コロナウイルス感染拡大に関連する自粛措置が取られる直前（2月）に最後のワークショップを行い、各チームのイノベーション計画の更なる練り込みを行いました。昨年選抜された各チームが、様々な課題を掘り下げ、リサーチを行い、パートナーシップを広げ、事業計画を改善していく姿はとても頼もしく見えました。課題を解決したいという現場の想いに、イノベーション・マネジメントのノウハウを加え、様々な分析を経て想いを形にしていくお手伝いはCWS Japanとして、とてもやりがいを感じています。これから各チームがHIFの助成金に応募し、採択されたチームは実施に向けて動き出します。課題の解決を見るのが楽しみです！

（文：事務局長 小美野 剛）



（ワークショップにて集合写真）

ミャンマー生活道路改善プロジェクト終了時評価報告

日本国際協力財団の助成によって2019年4月に開始したミャンマー（エーヤワディー管区マウビン・タウンシップ）生活道路改善プロジェクトがこの3月末に終了を迎えました。

道路補修工事は昨年の雨期の始めには完了し、その後は、メンテナンスに係る活動が続けられていました。工事完了後、初めての雨期を経験し、事業期間終了時点でプロジェクトが対象地域にどのような影響を及ぼしているのか、その確認と事業評価のため、2月に再び現地に向かいました。これまでも何回か、このニュースレター上で事業進捗をお伝えしてきましたが、このプロジェクトは、CWSミャンマーとの新たなパートナーシップであり、昨年終了した栄養改善事業の対象地15村の中から2村を選定し、防災事業の一環として開始しました。村の防災委員会から提示された課題の一つだった道路改善は、地域側からは無償の労働力、私たち外部支援者側からは、工事資材と技術指導を提供することで両者間で合意された受益者との協働事業です。

この度の終了時評価では、プロジェクトを担当したCWSミャンマー現場スタッフ（フィールドコーディネーター）からの聞き取りから始まり、翌日、1日かけて事業現場を確認しながら、母親達から地域の変化について意見を聞き取りを行いました。女性達から、先に話を聞いた理由として、事業開始時に行ったベースライン調査から、悪路によって最も影響を受けていたのが、毎日学校に通学する子供達であると感じたからです。実際、「地域の中で何が変わったのか？」という質問に対して、インタビューに応じた全ての住民が開口一番、「子ども達が安心して安全に通学できるようになった」という声が先ず聞かれました。

（次ページへつづく）

道路が改善される前には、雨季の間、道が水没したり、泥濘化（でいねいか）して歩行が困難となり、通学に時間がかかって遅刻が多くなり、途中で制服が泥で汚れるのを嫌がり学校を休むようになるという状況でした。ところが、道路改善後は、通学時間が半分近く短縮され、送迎していた保護者の時間も節約され、その分、家事や経済活動に費やせる時間が増えたこと、また、道路アクセスが改善されたことによって、地域内外での商売の機会も増え、経済活動が活性化されたそうです。更には、行政によって新たに助産師が駐在するクリニックが村内に設置されるなど、このように短期間に地域内で様々な変化が起きるとは、私たちも村の人々も当初想定しきれませんでした。

また、もう1方の村では、道幅が狭いため、乾期も設置したままにすることを決め、どちらの村でもパネルの破損個所を見つけ次第、道路管理委員会が住民から集金したり、近隣の村で道の草刈りをして得るお金を修繕費に充てることが合意されたそうです。



(住民が作ったコンクリートパネルの1枚)

今後もCWSミャンマーの現場スタッフを通して、その後の状況について情報を得ることになりますが、河岸浸食も含め、これらの対象地における災害リスクの問題は解決済みという訳ではなく、今後も引き続き、資金確保の機会を探していきます。この度の地域住民の皆さんとの協働から得られた学びと教訓を次の事業に活かしていきたいと考えています。

(文：ディレクター 牧 由希子)



(道路改修後に設置されたクリニック)

最後に、このようなインフラ施設整備で必ず問われるのが、維持管理の件です。今回の訪問は乾期だったので、道に敷き詰めたコンクリートパネルは、当初計画通り、片付けられて、道路脇に積み重ねられていました。

**当団体HPでもお知らせしておりますが、
新型コロナウイルス感染拡大防止への対応策の実施に伴い、事務局へのお問い合わせはメールにて承っています。**

[詳細はクリック](#)



CWSJapan



@Japan_CWS



cws_japan

日々の活動や事業の詳細や支援先の様子などを写真(ときどき動画)でお伝えしています！